

生成 AI 使ってみた!



本 多 敬 子 (P A 会)

2019年以降、新型コロナウイルスによるパンデミックの影響で、webミーティングの利用が急速に拡大し、さらにSpacialChatなどを利用したweb懇親会まで開催されるようになった。その渦中の2022年11月、生成AIブームのきっかけとなった対話型AI、ChatGPTが公開された。

必要に迫られてデジタル難民に甘んじていられなくなったものの、生成AIを使いこなすのは別世界のことのように感じていた。情報を自分のものにして育っていくAIに個人情報を入れるなんて、とも。

ところが、2023年5月に緊急事態宣言が解除され、リアルに集まる機会が増えてきた中、ある懇親会で登壇者された方がそのご挨拶の中で、

「今話題の生成AIを使って今回の挨拶文を作ってみました。」

とお話しし始めた。

「おお、そんな身近な使い方もある!？」

で、早速私も使ってみた。

まずは、

「簡単な時候の挨拶文を作って」

とお願いしてみた。TPOをわきまえた秀逸な文章ができあがった。カジュアルパターンやもっとフォーマルにも致します、とコメント付きで。

「…でも、これは私ではない…」

では、過去のデータに基づくものは得意なはず、と、お願いしてみた。

「非伝統商標について米国と日本の判例を入れて現況を教えて」

すると、素晴らしい回答が返ってきた。非伝統的商標について定義、歴史的背景などの説明に加え、米国と日本と事件番号の記載もある。ところが、そ

の事件番号、どこかおかしい。調べてみると全く関係のない裁判例が。もう一度聞いてみた。

「この事件番号、本当？」

「申し訳ありません、裁判例については、自分でお調べください。」

「…なるほどね…」。

私の生成AI利用の始まりはこんな風であった。でも、そこから試行錯誤を繰り返しつつ、AIとのやりとりを少しずつ積み重ねている。

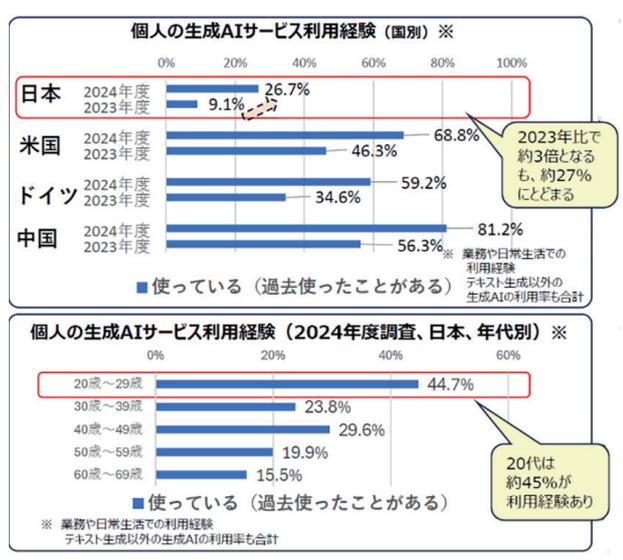
今では作成した英文レターをチェックしてもらい、同じ言い回しや似た表現が繰り返されないような文を提案してもらったり、フォーマルな文体に修文してもらったり、言葉の壁にぶつかったときにアイデアをもらったり、と便利に利用させていただいている。法務に特化した有料の生成AIサービス等もあるという。

そして、今年4月に日本弁理士会から、弁理士が生成AIを活用する際に留意すべき基本事項を整理した「弁理士業務AI利活用ガイドライン」が公開された。これまで自分なりに試行錯誤を重ねながらもやもやしていたAIの活用方法が、このガイドラインによって言語化され、「そうそう！やはりプロンプトが大事なのね…」などと、何度も頷いてしまった。

周囲では生成AIに関する話題は日常的になりつつあるが、総務省が今年7月に公表した2025年版情報通信白書によると、日本における個人の生成AI利用経験は、24年度26.7%にとどまっている。23年度の9.1%より大きく上昇したものの、比較調査した

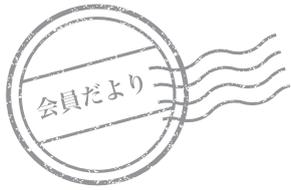
他国（米国68.8%、ドイツ59.2%、中国81.2%）より大きく遅れているのが実情のようである。因みに、年代別では、20代44.7%、30代23.8%、40代29.6%、50代19.9%、60代15.5%とのことで、世代間での利用格差も顕著なようである。

【総務省 令和7年度版報通信白書概要より抜粋】



このような報告もあるものの、生成AIを使ってみた結果、その活用方法によっては、大変便利なツールであると感じている。

自分の言葉を持ったまま使うこと、情報の真偽を見極め、プライバシーへの配慮を忘れないこと、などを自分に言い聞かせながら、どんどん知識を蓄積してていくAIに振り回されることなく活用し、より良い仕事へとつなげていけるようこれからも模索していきたい。



被写体とともに歩む



渡 邊 芳 則 (春秋会)

1. はじめに

私は2018年に弁理士登録し、以来ささやかながら知財の道を歩んでおります。会にはまだ加入して間もなく新人同然ですが、本誌に寄稿の機会をいただき、身に余る光栄を感じております。この場をお借りして御礼申し上げます。さて今回は、自身が知財業界へ入ってから度々お世話になっているフォトグラファーとの縁について振り返りご紹介いたします。

2. 不安定な社会変化のなか知財業界へ

私がこの業界に足を踏み入れたのは、2012年末のことです。本来はその前年に特許事務所へ転職する計画だったのですが、面接の3日前に東日本大震災に見舞われ、東北地域でメーカーに勤務していた私は都内への交通手段が断たれたため以後の予定が全てキャンセルとなってしまいました。震災直後からはしばらく工場の復旧に専念することになったのです。おかげさまで数カ月間、転職活動のことを考える暇もなくなりました。1年経って落ち着いた頃、再び知財業界への移動を考えるようになり、未経験ながらも縁のあった特許事務所へ受け入れてもらい、知財キャリアをスタートさせることとなりました。

その後、空白も挟みつつ、事務所業務に励みながら弁理士試験に挑戦することになります。先輩方から聞くとところによると10年以上も1次試験で足踏みしている方や、3次試験に落ち続けた結果撤退した方もいるとのことと恐ろしい世界に入り込んだものだと感じた記憶があります。自身が合格するかどうかについても当然保証はなく、常に気の晴れない受験生活を消化していました。忙しい日々の中、

当時婚約中であった妻との挙式を行うこととなりました。

3. 被写体として

挙式の準備期間中のスケジュールに前撮りが含まれていました。前撮りは挙式を予定しているカップルへの撮影の予行ないし本番での撮影オプションを検討するためのよい機会です。当日は何の準備もなく向かい、担当のスタッフと打合せを済ませ、案内されるままに式場屋外の庭園で撮影を行いました。撮影を担当頂いたのは、高橋さんという方で式場に専属されているとのことでした。

撮影が終わると、衣装、カット数、アルバムの製本内容などの撮影メニューについて打合せすることになるのですが、その中で先ほど撮ったばかりの写真も見せてもらったところ、その迫力に圧倒され、妻との意見が一致し挙式本番の撮影もお願いすることになりました。



八芳園会場へ通じる屋外扉前にて

この写真は本番での撮影後、構成してもらったアルバムの見開きページです。衣装や建物の装飾などもあり全体の印象は幻想的で現実離れしたシーンとなりました。右側の人物は反射する扉ガラス越しに程よく写り、左側のぼかした余白の上にもう一枚の

写真が重なります。残念ながら本稿では縮小表示となり伝わりづらいのですが、2枚ともそれぞれ左右離れた位置に人物を配置しているの、見開きページ全体は目線が紙面を端から端まで動き全体が広く感じられ、迫力のあるページになっています。

以降も、子どものお食い初めや、七五三などのプライベートの節目で、なにかと撮影をお願いすることになりました。



七五三 - 八芳園内庭園にて

家族の成長に伴って、同じ方に撮影していただくのも感慨深いものがあります。私は写真を撮られるのは得意ではありませんが同じ方に撮影頂いたおかげで抵抗が無くなってきたように感じます。妻のほうはというと義父が学生時代からアマチュアカメラをしており幼少のころからよくカメラを向けられていたことと、職業柄撮られる機会が多いため撮影慣れしているようでした。

4. 事務所でのイメージ撮影

次第に式場以外での撮影も依頼してみたくなり、以前私が勤めていた特許事務所の撮影もお願いしました。ロケーションについては職場が歴史ある建物や緑に囲まれた環境であったことから恵まれていたのではないかと思います。事前に要望をお伝えし2時間ほどで集合写真、各自のプロフィール写真、その他おまけを含め色々なシチュエーションで撮影頂きました。真冬の時期ということもあり落葉樹が多く、渋めのカットが多かったかもしれません。慣れない撮影でしたが誘導のおかげでバリエーション豊かに楽しく終えることができました。事務所のホームページでは使えないようなオシャレなカットも編

集してもらい個人的には楽しませて頂きました。

なお余談ですが、この日の2日後から体調を崩しており（その後3週間ほど入院）、私の表情はだいぶ空気で押し通しています。



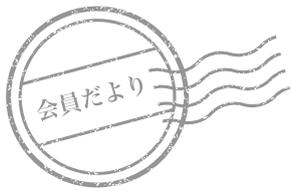
コートを着ながら日比谷公園内にて
弁理士法人前川知的財産事務所ホームページより
(<https://www.maekawa-ip.com>)

上の写真は事務所のホームページに掲載されているものの一つです。これ以外のカットも掲載されていますのでお時間あれば訪れてみてください。ホームページを見た同業の方からも雰囲気が良いと評価を聞いています。採用されたカットが評価の一助となっていればありがたいことです。

5. おわりに

ところで私事になりますが今年4月に独立し特許事務所を開きました。ここでも節目ということで、久しぶり（2年ぶり？）に家族写真およびビジネス写真のロケーション撮影を依頼しました。知財のキャリアをスタートし、弁理士試験に合格する前から現在までの変遷の間、細く長いお付き合いをさせて頂いていることとなります。また久しぶりにインスタグラムを訪れてみました。どれも単なる記録写真ではなく、以前にも増し写っている人達の背負っているものやその瞬間の感情がカメラを通じて伝わってくるような気がしてなりません。単なる代書屋ではなく内に隠れた依頼者の想いを体現する、そんな仕事をしたいと弁理士としても気を新たにさせられます。

※フォトグラファー 高橋将紫
(Instagram @toki_takahashi)



趣味というもの

小林 靖人 (南甲弁理士クラブ)

1. はじめに

皆さんには、趣味がありますか？

とある辞書によると、「趣味」とは、「仕事、職業としてではなく個人が楽しみとしている事柄」だそうである。私の個人的な感覚であり、また対象にも依るだろうが、「趣味」と言えば、月に数回程度はおこなうものであると考えている。

ここでは、私の趣味について、軽くエピソードを交えつつお話しようと思う。なかには、趣味に昇華することなく断念したものも紹介させていただくが、ご容赦いただきたい。

2. ゴルフ

大人になったらゴルフでしょ。そんな想いや、父の趣味がゴルフであったことから、ゴルフを始めてみた。始めた当初は、クラブがボールに当たるようになる感覚を楽しみながら、週一回程度練習場へ足を運ぶ日々を送っていた。父や友人と共にラウンドを重ね、ゴルフを始めて2年ほどで90を切るまでに上達した。

しかしながら、友人が家庭を持ち始めたことや、現在勤務している特許事務所への就職をきっかけに、徐々にコースや練習へ行く頻度が低くなっていった。現在では、練習に行くこともなく、年に2～3回程度ラウンドするのみである。当たり前の話ではあるが、練習もせずにつけ本番でコースを回っても、納得のいくスコアが出るわけがない。最近では100を切るのがやっとである。

ただ、機会は減ってしまったものの、気の置けない仲間達と自然に囲まれながらラウンドするのは実に楽しい。これからも、ゴルフを趣味として、楽しみたいと思う。

余談ではあるが、練習を再開して（行く気はあま

りないが）、上達するようなことがもしあれば、会派のコンペ等にも参加してみようと思う。

3. 立ち飲み

10年ほど前、学生時代の先輩に誘われたことがきっかけで、立ち飲みデビューをした。

「立ち飲み」と聞くと、「立ちながら飲むのって疲れない？」などと抵抗がある方も少なからずいるのではないだろうか。しかし、立ち飲みには、手軽さやコスパの良さ、たまたま隣になった他の客との交流の機会など、良いところが沢山ある。私自身も、実際に行ってみるまでは、立ちながら酒を飲むことに抵抗があったが、いざ実践してみると疲労感を感じることもなく（酔っ払っているだけという説もある）、そんなに悪くない。むしろ非常に楽しい。そんなこんなで、先輩に紹介された店に一人でも行くようになり、常連と言っていいレベルでその店に通うようになった。

コロナ禍の間は、店の休業や時短営業により、立ち飲みという趣味が成り立たなくなってしまったが、やっとコロナ禍も終わりを迎えた。今ではまた足繁く通っている、と言いたいところだが、昨年子供が生まれたため、状況が一変した。

現在は、妻の機嫌を伺いながら、たまに店に寄っては、立ち飲みの良さの一つである、「さっと飲んでさっと帰る」を心掛けている。今後も立ち飲みは続けるだろう。

4. 将棋

ご存じの方も多だろうが、一昨年、プロ棋士の藤井聡太が将棋界の8つのタイトル全てを獲得し、大きな話題を呼んだ。私は、駒の動かし方程度の知識しかなかったが、このニュースをきっかけに何と

なく将棋を勉強し始めた。

便利なもので、近年ではYouTube等のソーシャルメディア上で、将棋の定跡を解説する動画が多数存在する。私は、これらの動画で勉強しながら、スマートフォンアプリの「将棋ウォーズ」で将棋を指している。このアプリは、同程度の棋力のユーザ同士が自動でマッチングされて対局するものであり、私は現在2級である。2級までは順調に昇級したものの、最近は勝ったり負けたりで足踏み状態である。

先日、立ち飲み屋で知り合った将棋ウォーズ二段の方に、将棋バーなるものに連れて行ってもらった。今まで実際の駒に触れる機会はなかったが、将棋盤を挟んでの対局は実に趣があった。彼との対局結果は当然散々なものであり、まだまだ研鑽が必要だ。初段になることを目標として、今後も将棋を続けていこうと思う。

5. 登山

今年の4月、勤務先の特許事務所の先輩達に「山登らない？」と唐突に誘われた。

全く興味がないわけではなかったのですが、お誘いを快諾し、いざ御在所岳へ。意気揚々と臨んだ初登山であったが、完全なる運動不足と、普段からタバコを吸っている影響からか、中腹に差し掛かったあたりから、身体が思うように動かない。必死になりながらもなんとか登頂した。

登頂時の爽快感は格別であり、山頂で食したカレーラーメンは絶品だったが、下山する体力はもはや残っていない。先輩達の下山を見送った後、私は一人寂しくロープウェイで下山した。

登山を好きになる気持ちは分からなくもない。しかしながら、私には、ゴルフ場でも打球がコースを外れたときに山登りをする機会がある。残念ながら、登山を趣味とすることは叶わなかった。

6. プロ野球観戦

私の出身地は、愛知県豊橋市という。愛知県は、プロ野球の中日ドラゴンズの本拠地である。つまり、愛知県には中日ファンが圧倒的に多い。もちろん、全国的に人気がある巨人等のファンもそれなりにいる。そんな中、私は生粋のヤクルトスワローズファンである。愛知県内では、かなり奇妙な目で見られ

ることもあるが、子供の頃からヤクルトファンである。これは、乳酸菌飲料のヤクルトが好きだったことに由来する。

我がヤクルトは、2021年、2022年とセ・リーグを連覇した。しかしながら、一昨年、昨年は5位に甘んじており、今年現在に至っては、5位から大きく引き離された最下位に低迷している。

推しチームが弱いと、本来娯楽であるはずの野球観戦が辛いものになる。近頃では、野球をあまり見なくなってしまっている。弱くても応援するのがファンの鑑だという意見もあるだろうが、見るたびに負ける姿を見るのは辛い。またいつか強いヤクルトを見たいものである。その時には、試合を観戦しながらビール片手に東京音頭を歌いたい。

7. 麻雀

麻雀との出会いは、学生時代に遡る。サークルの先輩に誘われたことをきっかけに、麻雀を覚えた。当時、私は完全に麻雀に魅了され、最も酷いときには、月200～300半荘ほど打ち込んでいた（当然、留年した）。

大学を卒業後は、実際に牌を握る機会はほとんどなくなったが、私は、打つ方だけでなく、観る方も好きだ。2018年に、「Mリーグ」というプロ麻雀リーグが発足した。リーグ戦の開催期間は、月火木金の19時から試合が行われる。私は、見れる日には、名立たるプロが参戦するMリーグの試合を欠かさず見ている。

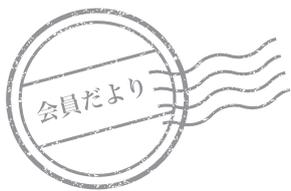
私が普段から麻雀観戦のためにテレビを独占しているからか、今では妻もある程度ルールを把握するまでになってしまった。1歳半の子供は、麻雀の試合がテレビに映っていると、なぜか騒ぐことなく静かにテレビを観ている。子育ての一部を麻雀に助けられていると言っても過言ではない。

今では、Mリーグ観戦が一番の趣味であるのかもしれない。

8. おわりに

いろいろと取り留めもなく書き綴ってみたが、私には、それなりに趣味と呼べるものがあつた。今後、家族との時間を大切にしつつ、時間を見つけて趣味を楽しんでいきたい。

皆さんには、趣味がありますか？



30年越しの「再会」と「再開」



松田隆子 (無名会)

1. はじめに

この数年間で、人と直接顔を合わせて話すことが、いかに貴重な時間であるかを実感された方も多いのではないでしょうか。オンラインでの交流がすっかり定着した今だからこそ、ほぼ元に戻りつつある様々なリアルな集まりに、特別な感慨を感じる今日この頃です。

そんな折、私もひょんなことから、一昨年、母校の関東同窓会総会の幹事を引き受けることになりました。実に4年ぶりとなる対面での開催ということもあり、準備は決して簡単ではありませんでしたが、旧友たちと力を合わせ、一つの目標に向かう毎日は、驚きと喜びに満ちた、かけがえのない時間となりました。

2. 「手伝うよ」の一言から始まった

事の始まりは、一昨年の春のこと。久しぶりに集まった同級生たちとのゴルフでの出来事でした。麗らかな春の日差しの中、ナイスショットや残念なOBに一喜一憂しながらカートで移動している最中、中心となって準備を進めていた友人が、ふと、こんな悩みを打ち明けてくれました。

「実は今、この秋の関東総会の幹事をやっているんだけど、なかなか大変で…。なにせ、コロナの影響で4年間はオンライン開催だったから、リアル開催のイメージが分からなくて、手探り状態でね」

コロナ前は400名もの方々が集ったという盛大な総会。しかし、当時はまだ緊急事態宣言が解除されて間もない頃で、誰もが大人数での集まりに慎重になっていた時期でした。

「参加人数が全く読めないから、会場選びからして本当に大変でさ。そもそも参加者が思うように集まらなかったら、会が赤字になってしまうかもしれない。そう思うと、本当に胃が痛くて…」

その姿を見て、私、軽い気持ちで言ってしまったんです。

「大変そうだね…。私でよかったら、何か手伝うよ」

まさかこの一言が、壮大な物語の序章になるとは、その時は知る由もなかったのです。

3. 7人の幹事会

かくして実行委員会の中心メンバーとして、奮闘の日々が始まりました。私たちの学年は全体で450人ほどいるのですが、当時はまだ大勢で集まるのはためられる時期でもあったため、まずは私を含めた7人で、総会の直前まで準備を進めていくことになったのです。こうして、7人による幹事会が、平日の夜に、渋谷の居酒屋で重ねられていくこととなります。

初めて顔を合わせたミーティングでは、まず近況報告から始まりました。「わー、全然変わらないね!」「あなたもね!」なんて、すぐに打ち解けて。真面目に議題を話し合っているかと思えば、誰かが「そういえば〇組の〇〇さん、どうしているかな」と言い出した途端、まったく関係のない思い出話で脱線してしまう。でも、その時間が、バラバラだった私たちの心を一つにしてくれました。まるで、本当にタイムスリップしたかのような感覚でした。会っていなかった時間の長さなんて一瞬で溶けてしまう、不思議で温かい空気感。利害関係のない「同級生」という繋がりには、やはり格別なものだと感じました。



4. 奮闘の日々と、仲間の温かさ

とはいえ、準備はやはり困難の連続でした。一番の心労は、なんといっても「集客」です。

「目標人数に届かなかったらどうしよう…」

そんなプレッシャーの中、SNSでの発信にも知恵を絞りました。懐かしい母校の写真を投稿して先輩方の郷愁に訴えかけたり、時には白熱する幹事会の様子を少しだけ公開して、私たちの真剣な思いを伝えようとしたり。こうした試行錯誤を重ねていきました。

また、準備の中でも特に力を入れたのが、総会のメイン企画です。何か記憶に残るものをと考え、同級生の中に素晴らしい活躍をしている友人がいたことから、彼に講演を依頼する案が上がりました。それと同時に、世代を超えた参加者全員が一体となって楽しめる企画も欲しいという話になり、母校にまつわるクイズ大会のアイデアが生まれました。

仕事の合間を縫っては、申込ページのカウンターをチェックして、申込が一件入るたびにグループチャットで「〇〇さんが申し込んでくれた!」「やったー!」と喜び合う、そんな毎日。しかし、始めはなかなか思うように伸びない申込者数を見て、不安を感じていました。その時、数字に強い友人が「過去の総会のデータを分析してみたんだけど、チケット早割の締切り直前の駆け込み申込みが7割だ。だから今は耐えどき!」と、冷静な分析結果をチャットに投稿してくれたのです。その的確な一言で、私たちの不安は「よし、それまでにもっと準備を完璧にしよう」という前向きなエネルギーに変わりました。その何気ない一言に、どれだけ救われたことか。仲間の存在がどれほど心強かったか、言葉に尽くせません。

5. 「再開」が育んだ、かけがえのない宝物

そして迎えた総会当日。会場の受付で、幹事仲間、そして当日の手伝いを引き受けてくれた同級生と「いよいよだね」と顔を見合わせ、高鳴る胸を抑えながら参加者をお迎えしました。あれだけ心配したのが嘘のように、会場には300名を超える沢山の方々が笑顔で集まってくださいました。懐かしい校歌の斉唱中、久しぶりに再会したであろう先輩方が、まるで高校生のような笑顔で肩を叩き合っている。その光景は本当に感動的で、これまでの苦労がすべて報われた瞬間でした。

そして、同級生による示唆に富んだ講演と、大いに盛り上がったクイズ大会という二本立ての企画は、多くの参加者から好評をいただくことができました。特に印象的だったのは、ある大先輩からいただいた「幹事、ご苦労様。4年ぶりのリアル開催は

大変だったでしょう。君たちの代がこうして頑張ってくれたから、何年かぶりに旧友に会えたよ。本当にありがとう」という温かい言葉でした。私たちの奮闘が、誰かの大切な再会のきっかけになれたのだと実感し、改めてこの役目を引き受けて良かったと思えた瞬間でした。

二次会、三次会では、無事に終わったという充実感と、これで終わってしまうのかという寂しさで、飲み過ぎてしまったのは言うまでもありません(笑)。

そして、この「再開」の価値は、総会当日だけに留まりませんでした。幹事という大役を務めたことで、10歳以上も年上の大先輩方から飲み会やゴルフコンペにお声がけいただいたり、これを機に同級生たちとは年に1~2回の泊りがけのゴルフコンペが恒例になったりと、交友の輪が大きく広がりました。

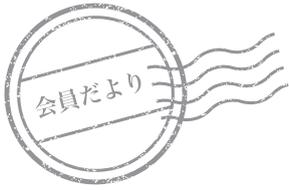
さらには、4年前の総会の幹事長を務められたのが、無名会に所属されている先生という嬉しい偶然もあり、人のご縁とは本当に面白いものだと感じています。



6. 人生を豊かにするつながり

弁理士という仕事は、時に一人で黙々と課題に向き合わなければならないこともあります。ですが、社会には仕事とは別の、様々なコミュニティがあり、そこにはまた違った人間関係や素敵な絆があるのだと、改めて実感しました。あの日の何気ない一言から始まったつながりが、今、これほど豊かで継続的な宝物となっています。あらゆるコミュニティは、誰かの「手伝うよ」という小さな一歩によって支えられているのかもしれません。

日本弁理士クラブもまた、同じ「弁理士」という資格で繋がった一つのコミュニティです。この会報を読んでくださっている先生方とも、いつかどこかでお会いした際には、旧知の友のようにお話しできれば、これほど嬉しいことはありません。



“押し”は『象』

横山麻理子 (稲門弁理士クラブ)

1. きっかけ

たぶん年末に放映されたNHKのBBCとの共同制作である「ワイルドライフ」を観た余韻が脳内のどこかに残っていたせいかもしれません。YouTubeでたまたまドキュメンタリー、『天王寺おばあちゃんゾウ 春子の夏日記』(<https://www.youtube.com/watch?v=6omnAGreRPw>)を観てから、私の象に対する印象がガラッと変わってしまいました。動物園で飼われているなんて可哀想、という感傷にも似た思いは吹き飛び、象の社会性があるととも賢い姿に、また、飼育スタッフの象への尊敬や愛情に、私はすっかり魅せられてしまいました。

2. 象との関わり

動物園は、幼稚園のバス旅行で、小学生になってからは両親に連れられて何度かいきました。象は、その巨体と、長い鼻とから、子供目線でも特徴的な動物です。また、「ぞうさん」という童謡があることから、知らない人がいないくらいなじみのある動物です。でも、その実態については知らない人が多いのではないのでしょうか。私も、つい最近までその一人でした。

3. 象の紹介

(1) 象のミニ知識

象は、長鼻目ゾウ科に属する哺乳類で、現在は、大別すると、アジアゾウ、アフリカゾウ、マルミミゾウの3種類が存在しています。日本の動物園で飼育されている象の半数以上がアジアゾウです。アジアゾウは、インド大陸やインドシナ半島に生息して

います。

象は、その大きさから、大人になると捕食されることはなく、怪我や病気にならなければ、長生きする動物です。動物園の象の平均寿命は50年程度になります。野生の象は、食べ物となる木や葉を求めて、一日中食べながら移動する生活を送っています。また、メスを中心に群れを作って生活し、その中で子育てをしています。オスは、子供のうちは群れで生活しますが、大人になると群れを離れて単独で生活します。

群れを作って生活することは、身の安全を守ることにもつながります。特に群れに子象がいる場合、身の危険を察知すると、血縁関係なく大人の象が子象を囲んで守ったりします。

象の特徴である鼻は、嗅覚に優れ、また、4万ほどの筋組織からできているので、非常に柔軟且つ細やかな動きを可能にしています。

睡眠は、子象の時は、体のどちらかの側面を地面につけて横になって寝て、傍らに母象または年長の象が見張りに立ちます。しかし、大人になると周囲が安全であると確信できる場合に限り体側を地面につけて横になりますが、そうでない場合は、立ったまま寝ています。ちなみに、冒頭の動画のおばあちゃんゾウ、春子さんですが、動画が撮られた20年くらい前に園内でゾウ舎(寝室)の引っ越しがあり、引っ越し前には横になって寝ていたそうですが、新ゾウ舎では横になることはなく、亡くなるまで立ったまま寝てました。

なお、象は、横になって寝ると、巨体が肺を圧迫して呼吸困難になって死につながるため、1時間お

きくらしいに起きて体の向きを変えています（写真参照）。写真は、東京ズーネットのサイトから引用しました。



https://www.tokyo-zoo.net/topic/topics_detail?kind=news&inst=tama&link_num=28693

(2) 象と人との関係

アジアゾウは、インドやタイでは荷役動物としても活躍しています。長い鼻は筋肉の塊なので、森林で伐採された丸太を運ぶことができます。日本で家畜として買われていた牛や馬と同じように、東南アジアでは象を家畜として飼って活用しています。ちなみに、スリランカでは象は神の使いとして大切にされています。

象は、巨体に似合わず気質はとても繊細で、動物園では、飼育スタッフとの信頼関係がないと、象に近づいて世話をすることができないようです。動物園なので、複数の飼育スタッフが世話をしますが、象は、世話をしてくれるスタッフに対し自分との上下関係を持っているそうです。2024年7月に福岡市動物園にミャンマーから4頭の象が来園しましたが、日本での生活に慣れるまでミャンマーで象を世話していた象使いが数か月にわたり、日本人スタッフと一緒に世話をし、新しい環境、新しいスタッフに慣らしていったようです。

なお、人間のみならず、同じゾウ舎にいる象に対しても、仲良くというわけにはいかないみたいで、象同士にも相性があるようです。仲の良い象と、そうでない象とがいて、仲が悪いと闘争になるので、別々の放飼場に様子を見ながら放つようです。

4. いざ、動物園へ

身近に象を見るなら動物園に行くしかないでしょう、と、それまでは、動物園は、動物を檻の中に閉じ込めているというネガティブなイメージしかもてず十年もいかなかったのですが、動物園行きを決行することになりました。

(1) 上野動物園

行った時期が2月後半と寒かったせいか、象は屋外ではなく室内にいました。上野動物園には、メスのウタイが2020年10月に出産したオスのアルンがいて、親子の象を見ることができます。日本では、象は野生では生息していないので、生息地から連れてくることになります。しかし、日本がワシントン条約を承認して以来、絶滅危惧種である象は、繁殖目的など、生息地の理解が得られないと日本に連れてくるのが難しくなったため、日本国内の動物園でも繁殖が試みられるようになりました。アルンは、上野動物園で初めて誕生した象になります。アルンは、今ではそれなりに成長して母象であるウタイとの共同生活が難しくなったため、ウタイとは分かれて生活しています。私が見ることができた像がウタイ、アルンのどちらであるかはわかりませんでした。室内にいるとはいえ、部屋のあちこちに仕込まれた人參やわらを鼻で器用に手繰り寄せて食べるさまに、あまりにも鼻が柔軟かつ器用に動くので、直で見ていると感動ものでした。

(2) 円山動物園

6月に札幌に行く機会があったので、ついでに円山動物園に行ってきました。丸山動物園には、シーシュ（オス）とパール（メス）との間に2023年に誕生したタオ（メス）がいます。象とはいえ、子象なので人間の子供と一緒に、好奇心旺盛で、また、身軽なのでひょいひょいと素早く歩きます。

丸山動物園には、この3頭の象以外に、シュティン（母）とニヤイン（子）の2頭がいます。ニヤインは、タオとは血縁関係はありませんが、タオより年上になるのでタオの面倒をよくみています。また、タオもニヤインが大好きなようで、ニヤインと同じ

放飼場にいるときは、ニヤインと行動を共にしていることが多くあります。私が訪問した日は、親子毎に放飼場に出ていて、タオとニヤインとは別々だったので、2頭が触れ合う様子を見ることはできませんでした。

次の写真は、象がえさを食べているときのものです。足元の丸太は、象自身が近くから足で転がしてきて踏み台にしたものです。丸太を足で転がしているさまを目の当たりにして、その賢さに感動しました。最近の動物園は、動物の福祉にも考慮した対応をしているので、加齢による首の筋力の低下を防ぐために、わざわざ届きにくい高さのところにえさを吊るして首の筋肉が衰えないようにしているとのことでした。



4. 最後に

ワシントン条約の承認に加え、近年の象の生息国での保護もあって、若い象を国内に導入することが難しくなり、国内の動物園にいる象の高齢化が進んでいます。近い将来国内の動物園から象がいなくなるかもしれない!? そんな危機感の中、最近、動物園での象の繁殖への関心が高くなっています。その一方で、アフリカでは、開発により居住地を失いつつある象による集落への襲撃が問題になっているので、象の保護に異議を唱える国もあります。象を推しつつ、推した象を介して自らの視点が新たに拓けることを楽しんでいきたいと思っています。